

東国における古代道路 ——東山道を中心として——

池 上 悟

1

律令制下においては、全国は七道に行政区分された。東山道は古代の行政区分である七道の一つであり、近畿地方から中部・関東地方を経て東北地方に連なる地域である。近江・美濃・飛騨・信濃・上野・武蔵・下野・陸奥・出羽の各国が属し、これらの諸国を結ぶ道路も東山道と称された。このうち武蔵国は、771（宝亀2）年に東海道へ編入されている。

古代道路の運営・管理のためには駅家が設置され、国司に任じられた駅長があたった。駅家は30里（約16キロメートル）ごとに設置され、駅使の乗用に供するため一定数の駅馬がおかれた。規定では東山道は東海道とともに中路とされ、駅家ごとに10匹を置く規定になっていたが「延喜式」では実情に応じて、神坂峠のふもとの美濃国坂本駅、信濃国阿知駅が30匹となっている。

律令制下で全国的に整備された古代道路の遺構は、近年の大規模な発掘調査により明確になってきている。交通を目的とする大規模な直線を基本とする道路遺構は、両側に掘られた溝と、溝に挟まれた範囲に認められる硬化面を特徴としている。

古代道路跡が発掘調査により各地で明確になっているのに対して、道路を管理・運営するための駅家の遺構が明確になったところは山陽道の野磨駅家・布勢駅家など極めて少ない。野磨駅家は、兵庫県赤穂郡上郡町落地に所在しており、幅10.3mの道路跡に隣接して初期の掘立柱建物からな

る初期駅家と、瓦葺建物からなる駅家が確認されている。

初期駅家は、幅30m、奥行き23mの門を伴う長方形区画の内部に正殿と脇殿が配置されており、周囲には付属施設を伴っている。瓦葺建物からなる駅家は、南北94m、東西68mの範囲を道路とは斜交して瓦葺築地塀で囲ったものであり、南門と道路側の西門を有しており、内部に瓦葺の正殿、後殿と脇殿を配置している。初期駅家は道路面に隣接して正しく直交しているのに対して、瓦葺建物からなる駅家は、道路面からは一段高い丘陵裾を造成して築造されている。初期駅家は7世紀後半代に遡及して築造され、瓦葺駅家は8世紀前半から11世紀代に機能を果たしたものと想定されている。

布施駅家は幅7mの道路に面して東西87m、南北82mの規模で確認されている。野磨駅家とは異なって同一地点で掘立柱建物からなる初期駅家と瓦葺駅家が確認されている⁽¹⁾。

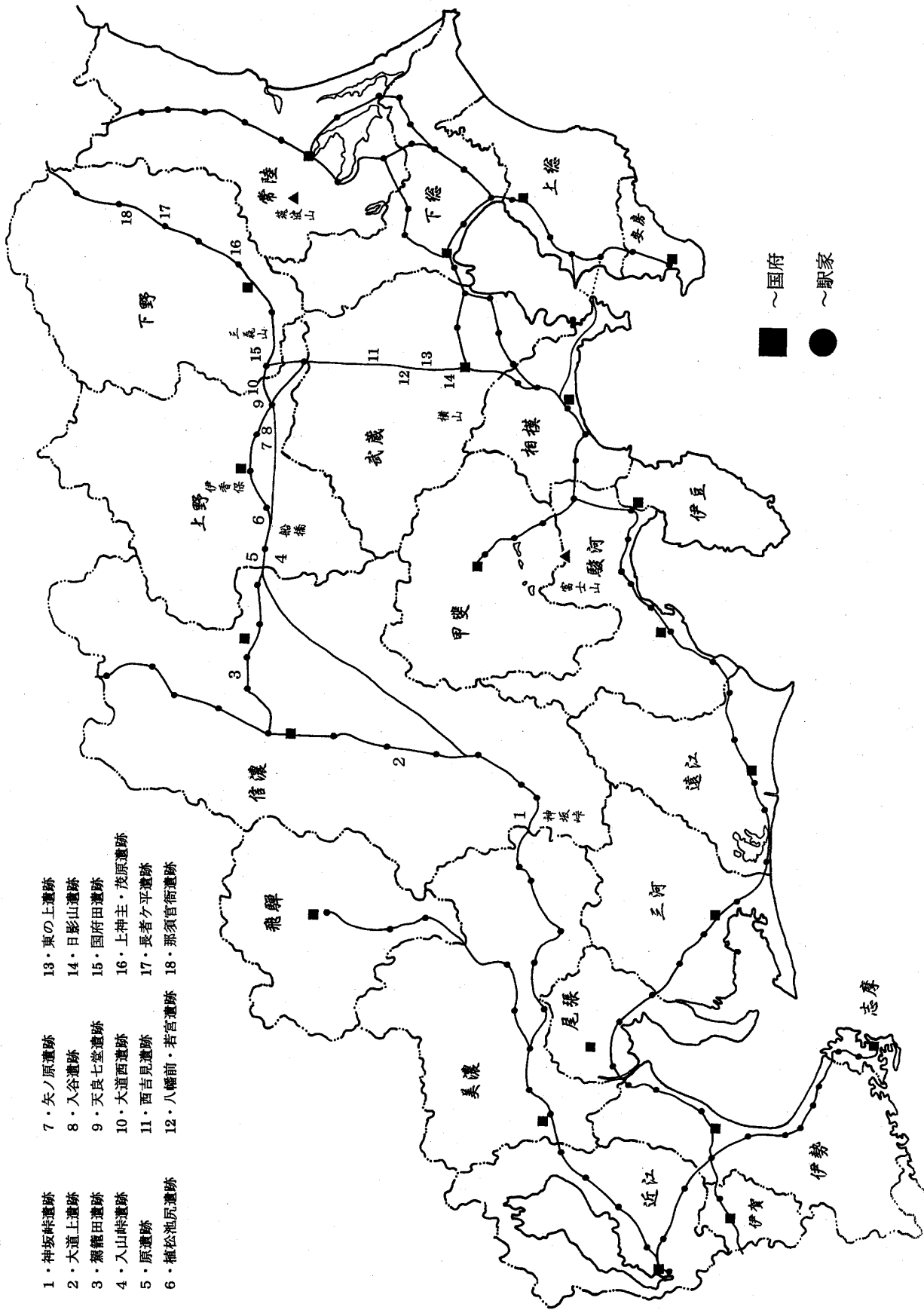
東山道では駅家と想定される遺跡は数箇所認められるものの、確定するには至っておらず、今後期待されるところである。

以下に調査で明確になった道路関係遺跡の概略を記し、万葉人が通った道を考える礎としたい。

2

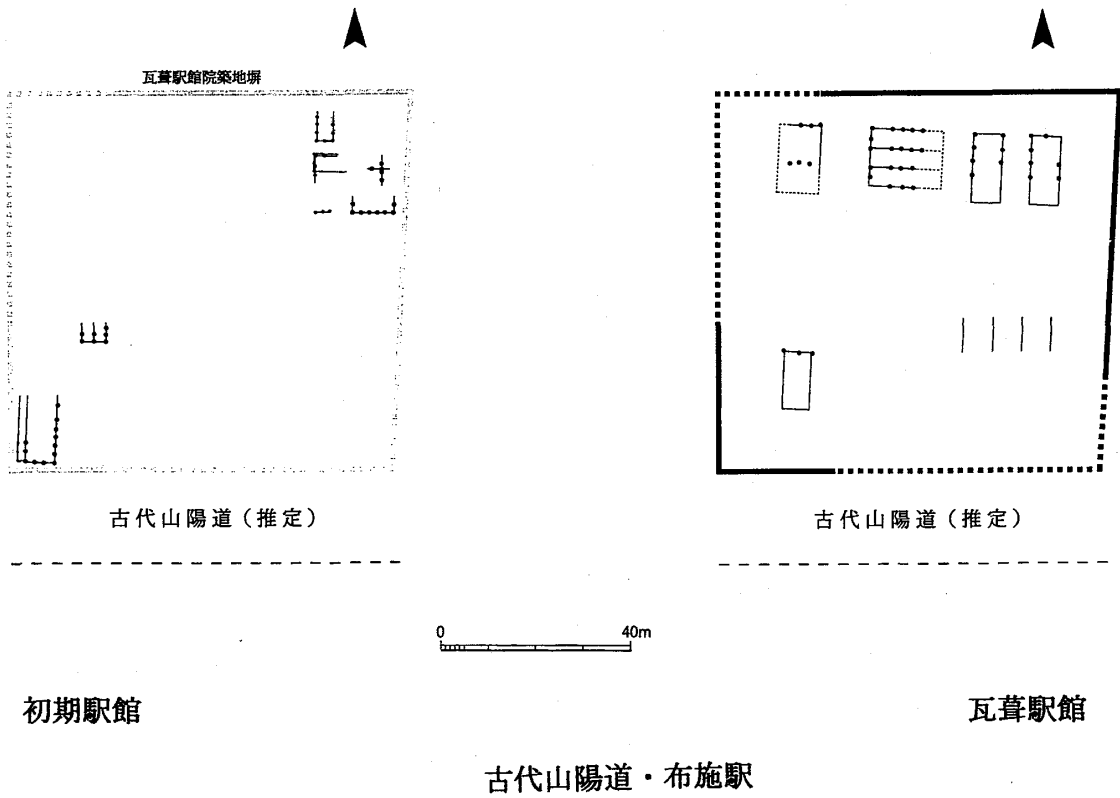
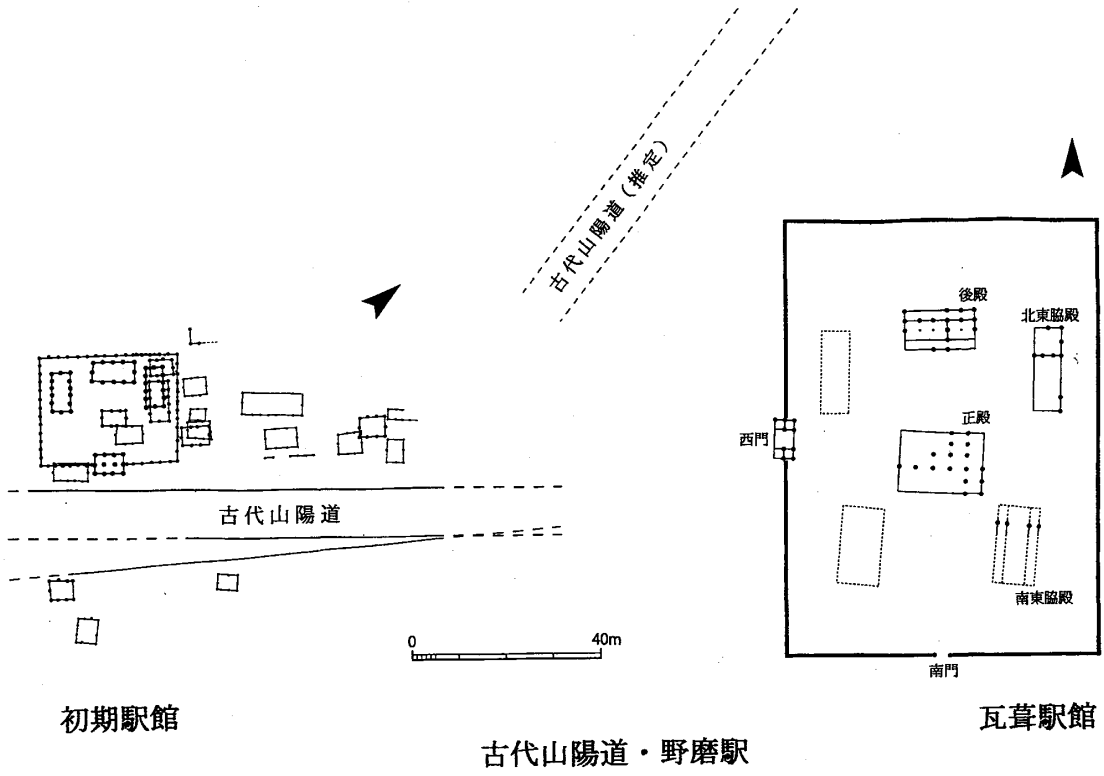
【1・信濃国】

信濃国における東山道は、美濃国との境をなす神坂峠から、阿知・育良・宮田駅と伊那谷を北上



- | | | |
|----------|-------------|-------------|
| 1・神坂峠遺跡 | 7・矢ノ原遺跡 | 13・東の上遺跡 |
| 2・大道上遺跡 | 8・入谷遺跡 | 14・日影山遺跡 |
| 3・駕籠田遺跡 | 9・天良七堂遺跡 | 15・国府田遺跡 |
| 4・入山峠遺跡 | 10・大道西遺跡 | 16・上神主・茂原遺跡 |
| 5・原遺跡 | 11・西吉見遺跡 | 17・長者ヶ平遺跡 |
| 6・植松池尻遺跡 | 12・八幡前・若宮遺跡 | 18・那須官衙遺跡 |

第2図 東山道と関連遺跡



第3図 山陽道の駅館

し、深沢・覚志、松本の国府、錦織駅で越後国に向かう道路が分岐し、東進して浦野・日理、上田の国府、清水、長倉駅を経て上野国との境をなす碓氷峠に至っている。また高遠町から雨境峠・瓜生坂峠を経て軽井沢町の入山峠に至る道路は、古東山道と呼ばれている。

信濃国における道路跡の調査はそれほど進展してはいないが、山国である信濃が隣接する国々との境をなす峠遺跡の調査は古くから行われている。

① 神坂峠遺跡⁽²⁾

神坂峠は木曾川により開析された木曾谷と天竜川により開析された伊那谷とを結ぶ、古代東山道の美濃国と信濃国の境をなす峠であり標高1595mを測る。大正年間より考古学的な調査が開始され、戦後の昭和26年に行われた調査により初めて祭祀遺物が発見され、昭和43年に本格的な発掘調査が実施されている。

峠の北西部分の12×20mの範囲が発掘調査され、石製模造品を中心とする多量の祭祀遺物が出土している。剣形模造品310個、石製模造鏡1、有孔円板45、勾玉27、管玉20、白玉903、刀子模造品15、斧形模造品1、鎌形模造品1、馬形模造品1、ガラス小玉29などが出土している。また土器類は、土師器・須恵器のほか灰色釉陶器・緑釉陶器・舶載磁器などが出土している。ほかの種類遺物としては、獣首鏡破片、鉄鏃・鉄斧などの若干の鉄製品なども出土している。

これらの出土遺物の示す年代は、古墳時代の4世紀代から古代・中世に及んでおり、長期間に及ぶ峠における祭祀の実践を物語る資料となっている。

② 入山峠遺跡⁽³⁾

入山峠は、信濃国と上野国の国境をなす峠であり標高1034mを測る。古代東山道は、北方に位置する碓氷峠を通るが、これ以前の交通は入山峠が利用されていた。発掘調査は昭和44年

に本格的に行われ、峠の頂上の平坦地の200m²が対象とされた。

出土遺物は、管玉22、白玉273、有孔円板42、剣形石製模造品170、刀子形石製模造品1、鉄製品4、土師器片16など、総数は2000点を越えている。

これらの遺物は古墳時代の4・5世紀代を中心としており、原初の碓氷坂として機能していたものと考えられている。

③ その他の遺跡⁽⁴⁾

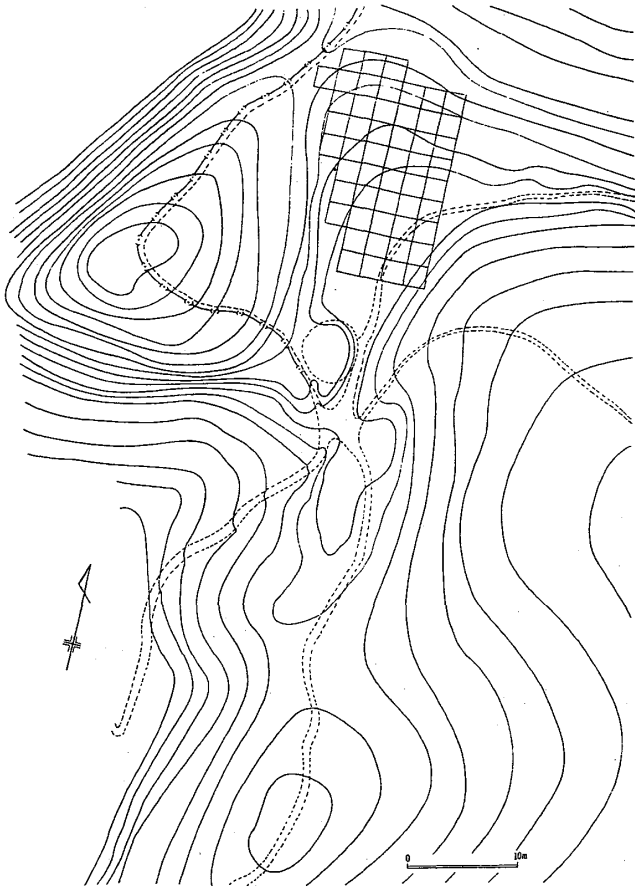
その他の遺跡では、上伊那郡蓑輪町の大道上遺跡で確認された、北-14°-東方向に長さ50mが確認された幅約3mの溝が道路の側溝の片側として想定されている。また上田市駕籠田遺跡では、両側を幅80cmの溝で画された幅450cmの道路跡が40mにわたって確認されている。この道路は浦野駅から日理駅に至る東山道推定ルートに重なっており、8世紀後半代の遺物が出土している。

【2・上野国】

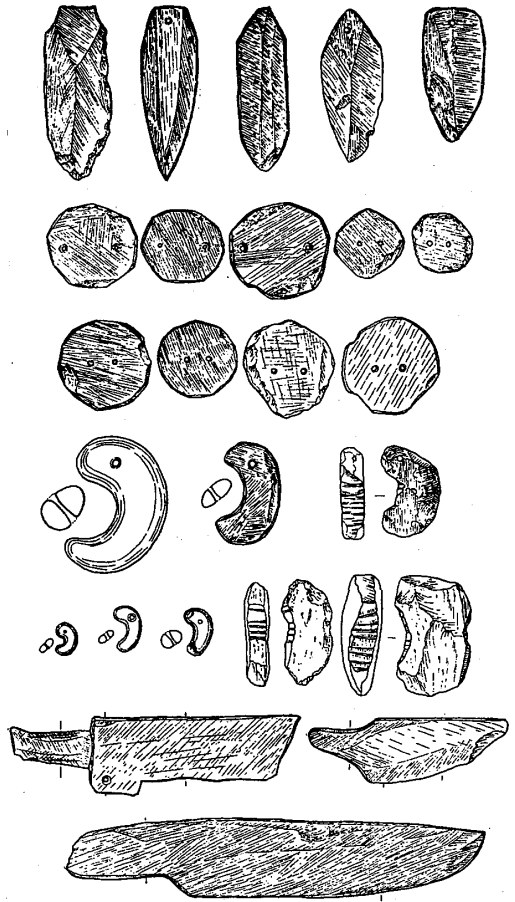
上野国内の東山道は、信濃国との境をなす碓氷峠から、坂本・野後駅を経て国府近くの群馬駅、佐位駅・新田駅を経て下野国の足利駅に通じている。前橋市に所在する国府近隣では、国府に隣接して走行する「国府ルート」と、野後駅手前から東進して新田駅に至る「牛堀・矢ノ原ルート」の存在が知られている。

牛堀・矢ノ原ルートは、古代佐位郡から新田郡にかけて直線9kmが確認されている。境町で3地点、新田町で7地点が調査されている。両側溝により区画された道路幅は13m前後であり、調査地点の出土遺物から7世紀後半代に開鑿され、8世紀後半代に廃絶されたことが判明している。

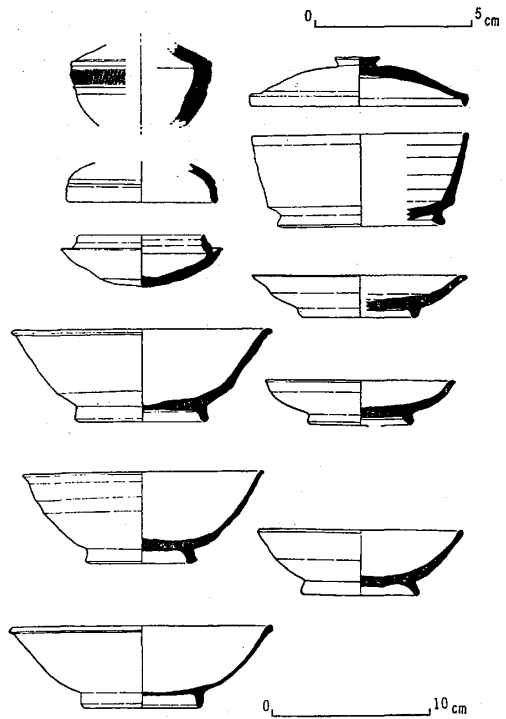
これに対して国府ルートは、前橋市鳥羽遺跡から高崎市寺ノ内遺跡に至る7kmの道路跡が確認されている。道路跡の幅は450~500cmと狭く、



信濃・神坂峠遺跡

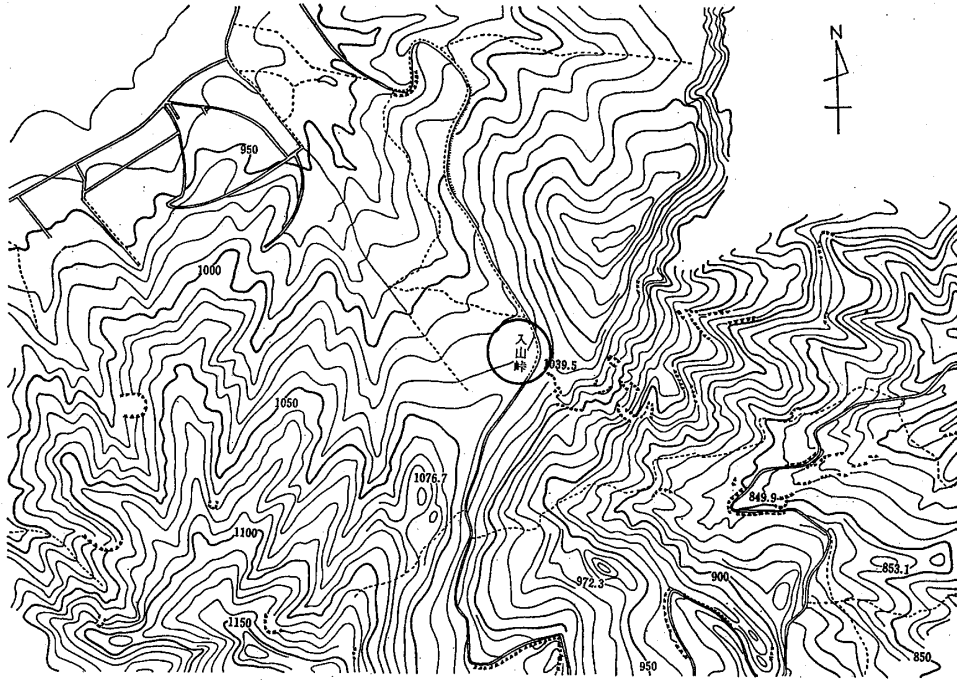


積石遺構

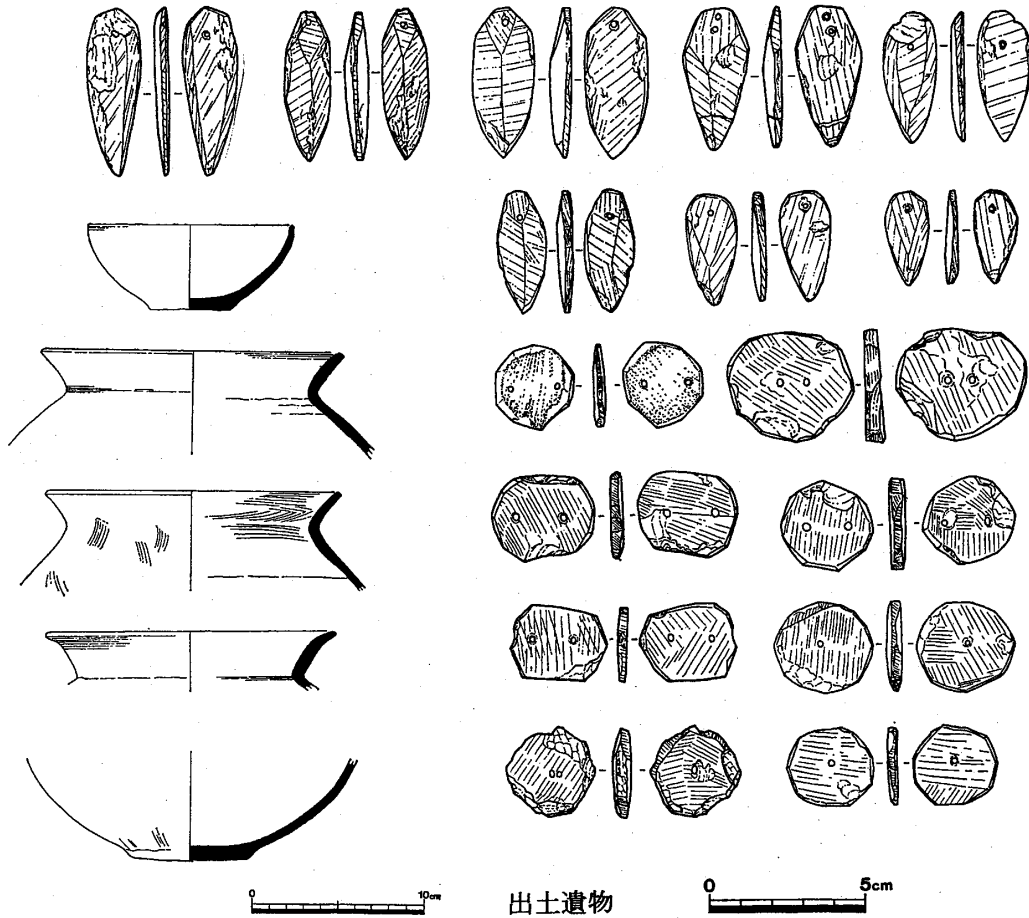


出土遺物

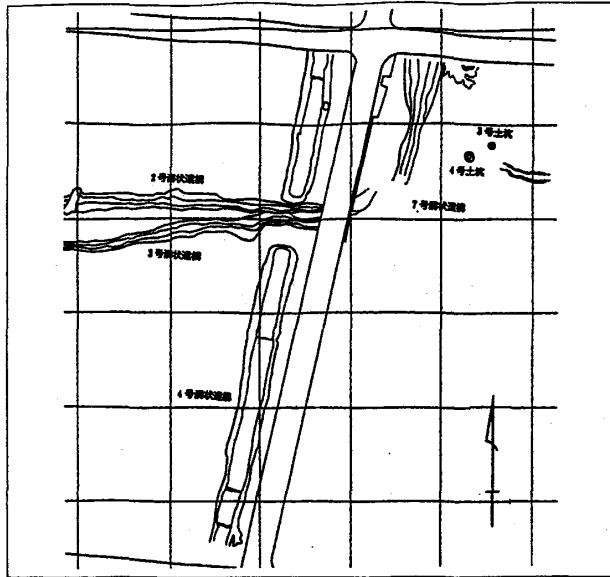
第4図 信濃国東山道関連遺跡(1)



信濃・入山峠遺跡



第5図 信濃国東山道関連遺跡(2)



信濃・大道上遺跡

第6図 信濃国東山道関連遺跡(3)

出土遺物から8世紀代後半に開鑿されたものと考えられている。

すなわち東山道は、7世紀後半代の国府成立に先行して開鑿され、8世紀後半代に牛堀・矢ノ原ルートから国府ルートに変更されたものと考えられている⁽⁵⁾。

① 矢ノ原遺跡

佐波郡境町東に所在する矢ノ原遺跡では、道路跡は幅13.1~13.4mで40mほど確認されており、出土遺物から8世紀後半以前の年代が考えられている。

② 大道西遺跡⁽⁶⁾

大道西遺跡は、上野東部の標高223mの金山の北側の平坦地の、群馬県太田市東今泉町大道に位置している。両側溝間13m前後を測る道路跡が170m確認されている。両側溝の幅は1.5~2.5mであり、北-98°-東とやや南に偏って東進している。また北側に分岐した枝道が幅3.5mで18m確認されている。遺跡の東端に道路を挟んで2基確認された8世紀後半代の竪穴住居跡は、道路と関連して機能していたものと

想定されている。

③ 入谷遺跡

新田郡新田町村田に位置する入谷遺跡は、牛堀・矢ノ原ルートに沿って180m四方が溝によって方形に区画された遺跡であり、区画内部からは7世紀後半から8世紀後半にかけての瓦葺礎石建物跡が東西に並置して確認されている。新田駅家の倉院ないしは新田郡家の倉院と考えられている。

④ 天良七堂遺跡

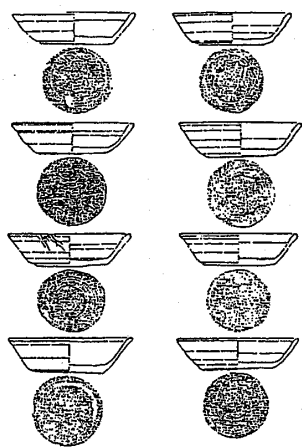
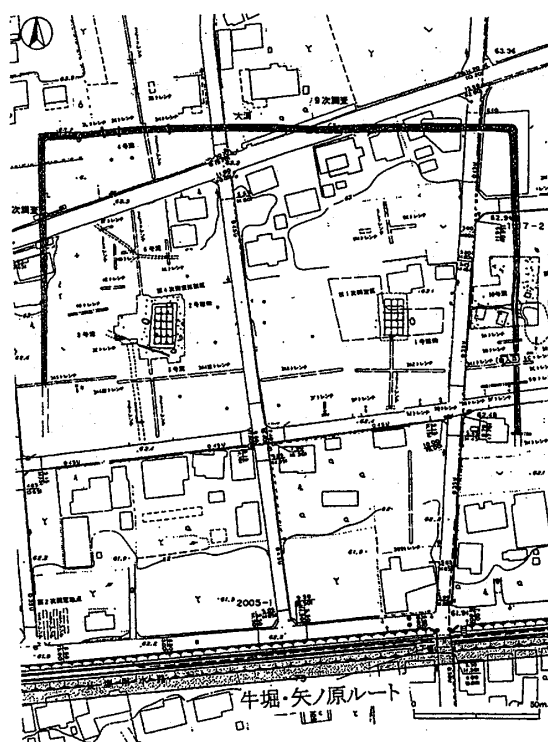
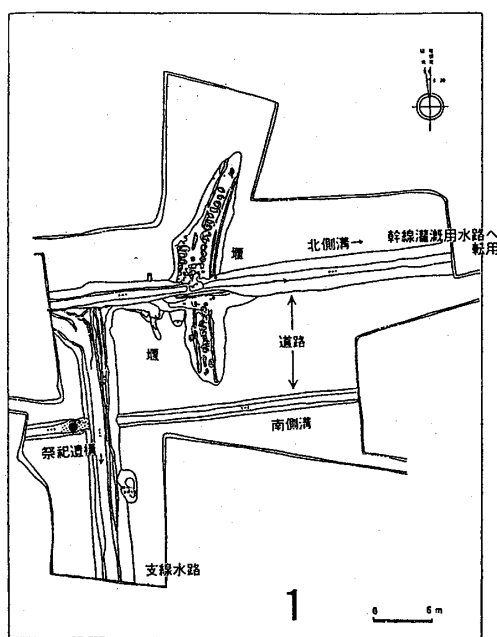
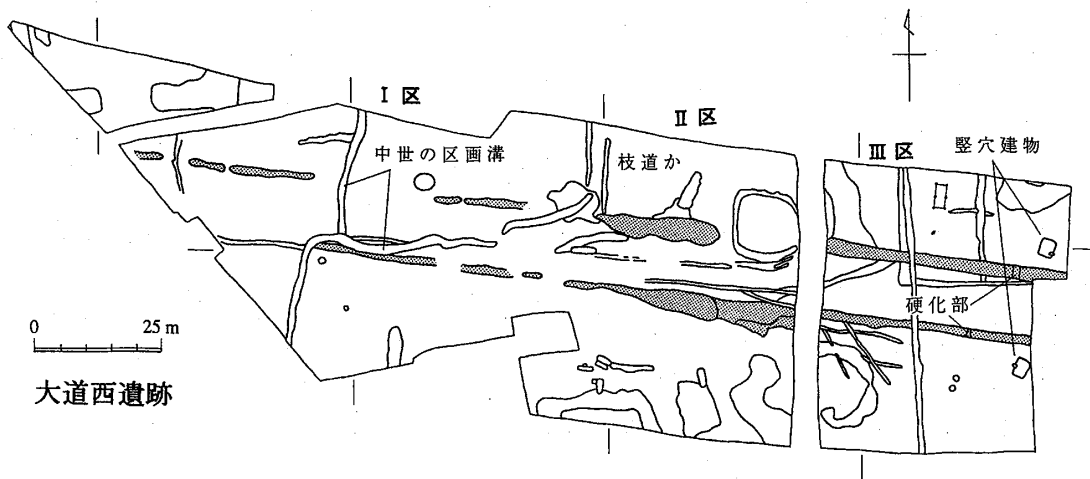
牛堀・矢ノ原ルートに沿った入谷遺跡の東1kmの、新田町村田から太田市天良町に展開する天良七堂遺跡は、東西400m、南北800mに及ぶ遺跡であり、掘立柱建物跡、総柱礎石建物跡などが確認されており、7世紀後半代から9世紀後半代にかけて機能した、新田評家、新田郡衙と想定されている。

⑤ 植松池尻遺跡

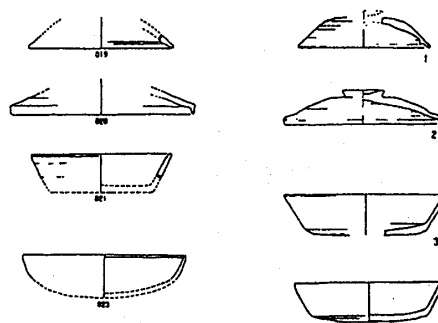
東山道の野後駅は、碓井川北岸の安中市上野後・下野後の地に想定されているものの、発掘調査により確認するに至ってはいない。推定駅路の北側に接する安中市の植松池尻遺跡では、大形掘立柱建物跡、柵列などが確認されている。7世紀後半代の「評」の刻書土器の出土から、碓井郡家の可能性が指摘されており、近隣に野後駅が推定されている。

⑥ 原遺跡

松井田町原遺跡では、8世紀代の所産と想定される梁間3間、桁行11間で東を除く3面に庇を持つ細長い掘立柱建物跡が確認されており、坂本駅家の可能性が想定されている。

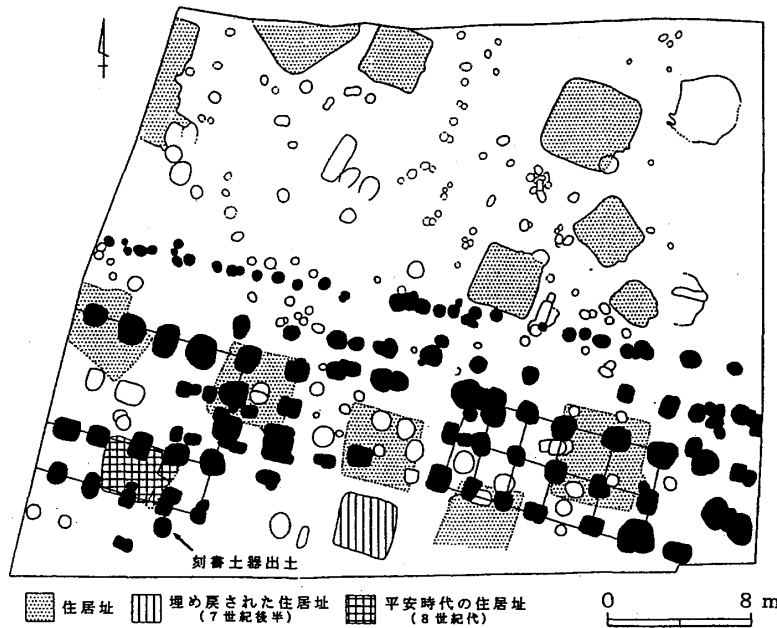


矢ノ原遺跡

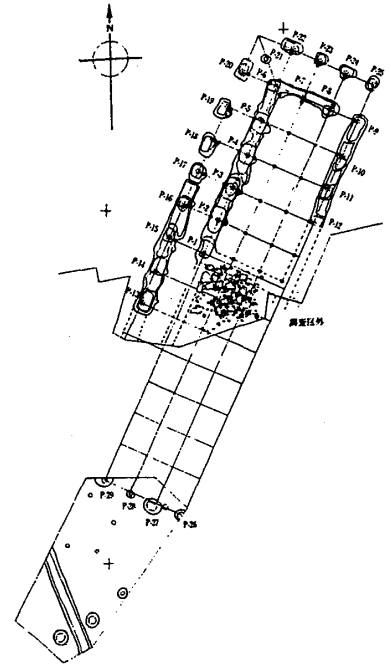


入谷遺跡

第7図 上野国東山道関連遺跡(1)



上野・植松池尻遺跡



上野・原遺跡

第8図 上野国東山道関連遺跡(2)

【4・武蔵国】

武蔵国は、771（宝亀2）年に東海道へ編入される以前は東山道に所属していた。このため東山道本線から分岐して武蔵国府に至る支線が設置されている。東山道武蔵路と称されており、この路の存在は東の上遺跡の発掘調査により明確となった。

武蔵国の所管代えは『続日本紀』光仁天皇の宝亀2（771）年10月の条に、「太政官奏。武蔵国雖属山道。兼承海道。公使繁多。祇供難堪。其東山駅路。従上野国新田駅。達下野国足利駅。此便道也。而枉従上野国邑楽郡。経五ヶ駅。到武蔵国。事畢去日。又取同道。向下野国。今東海道者。従相模国夷参駅。達下総国。其間四駅。往還便近。而去此就彼。損害極多。臣等商量。改東山道。属東海道。公私得所。人馬有息。奏可。」と認められる。

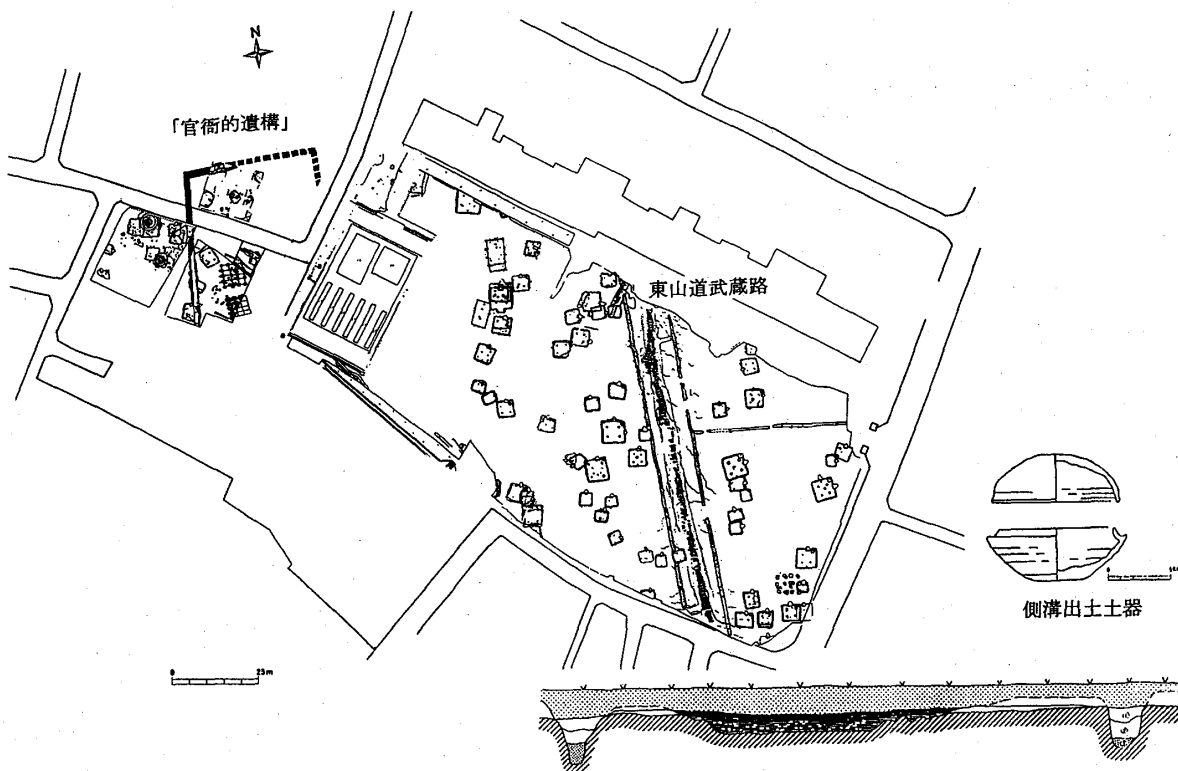
すなわち武蔵国が東山道に属していた宝亀2年以前には、東山道本道の上野国邑楽郡から分岐して5ヶ所の駅を経て武蔵国府に至る道路が設置さ

れていたことを窺うことができる。

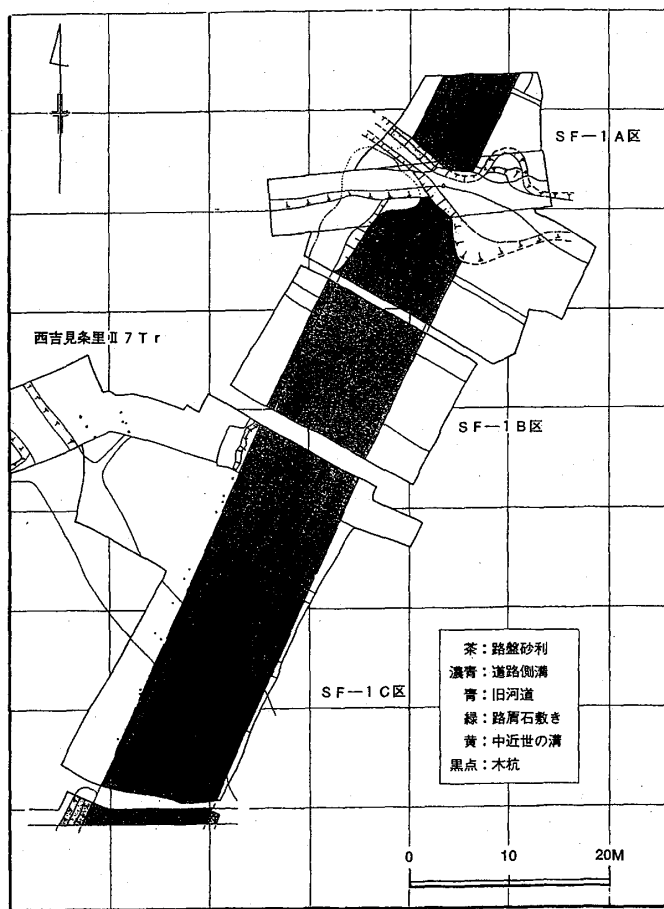
① 東の上遺跡⁽⁷⁾

この遺跡は、武蔵国府から約13km隔たった埼玉県所沢市の柳瀬川左岸の台地上に位置している。平成元年に学校用地内の調査により確認された道路遺構は、側溝の中心間で12mの幅を有して100mの範囲で検出されている。数次の調査で確認された道路跡の長さは300mに及んでいる。走行方位は北に向かうに従ってやや西に傾く、 $N-10^{\circ}-W$ を採る。側溝は幅80～120cmで、深さは30～100cmである。側溝間の道路面は、中央部の幅3～5mが浅く窪んで硬化している。

側溝内の土坑からは7世紀中頃の須恵器の蓋坏が出土しており、道路開鑿の上限年代を示す資料となっている。道路の周辺には多数の竪穴住居跡が展開しており、集落が形成されていたことが判明している。さらに100m西側には1辺40m以上に想定される、道路跡と主軸方位を合わせた溝で区画された方形区画が確認され

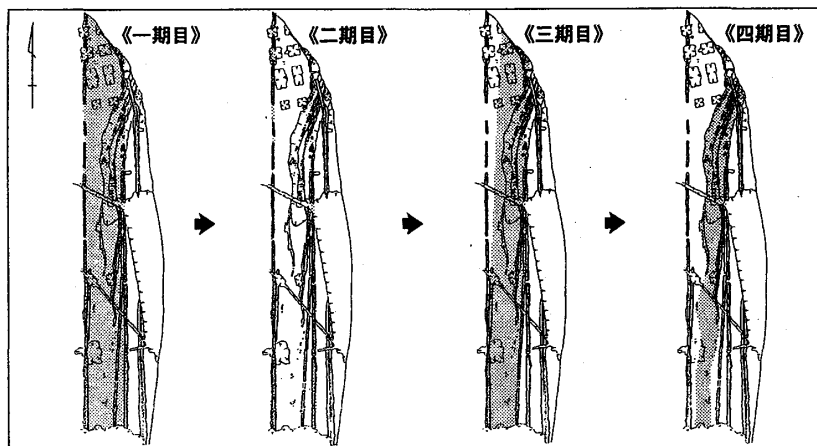
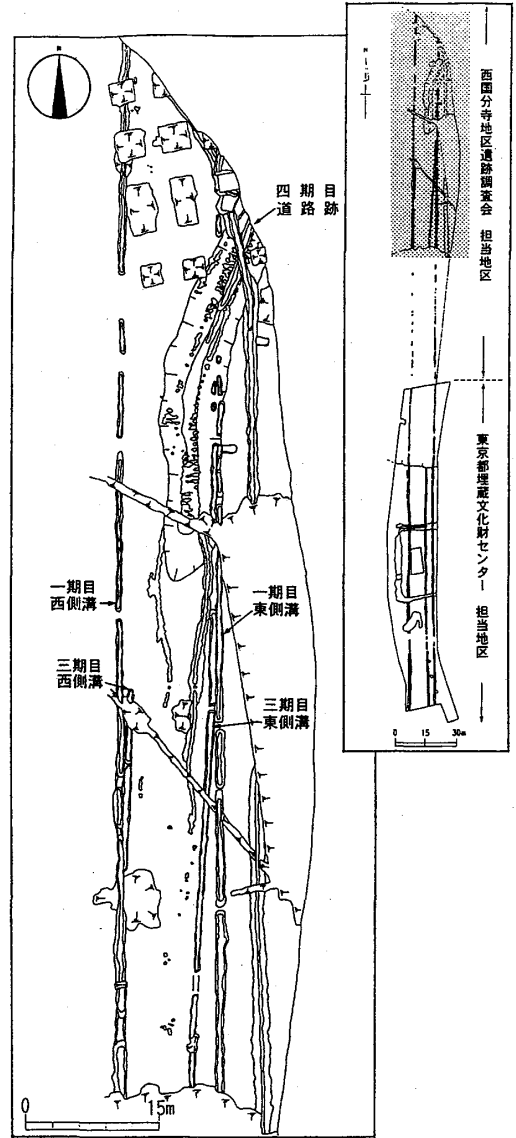


東の上遺跡



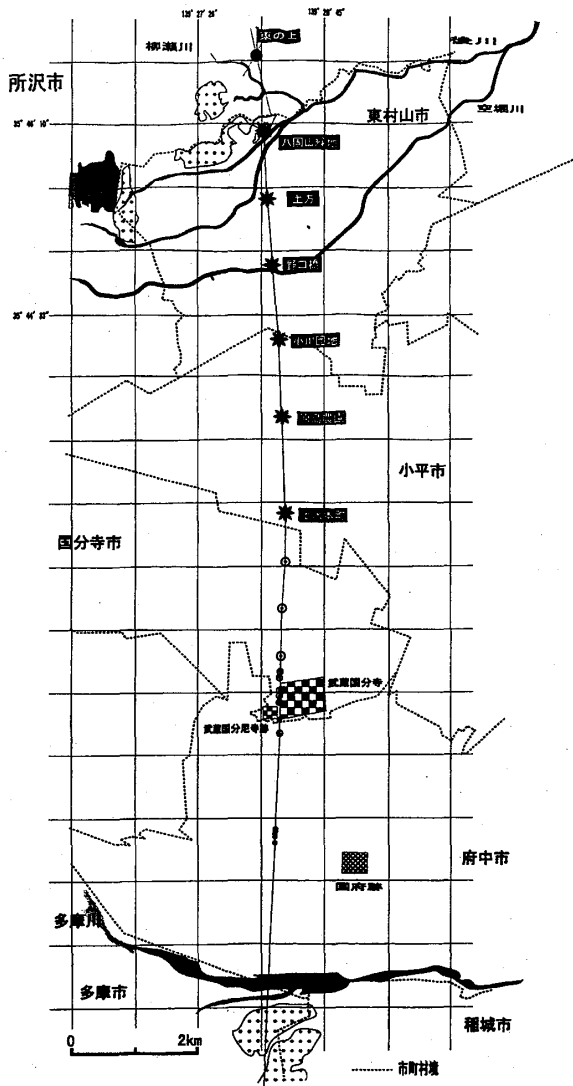
吉見古代道路跡

第9図 武蔵国東山道関連遺跡(1)

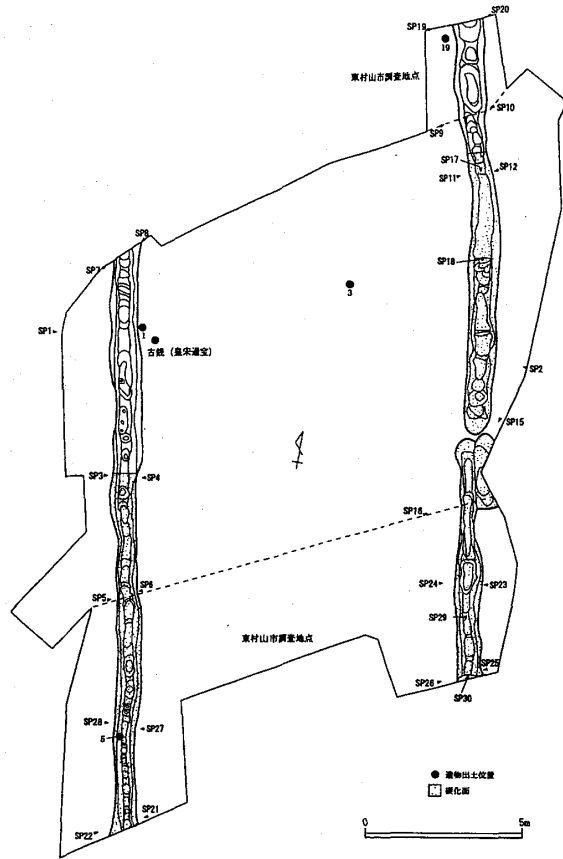


武蔵・日影山遺跡

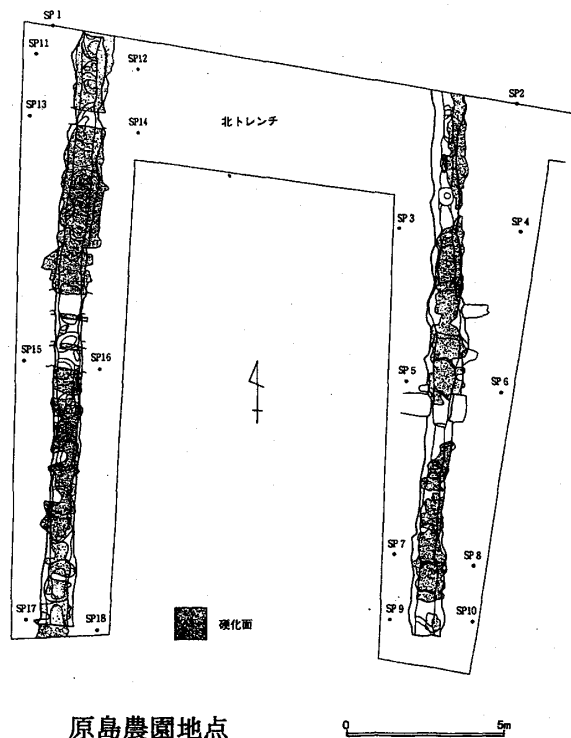
第10図 武蔵国東山道関連遺跡(2)



東山道武蔵路・南半部分



土方邸地点



原島農園地点

第11図 武蔵国東山道関連遺跡(3)

ている。幅250cm、深さ120～150cmの溝で区画された内部には3×4間規模の総柱建物跡などが溝に主軸を合わせて確認されており、駅家の可能性が高いものと想定されている。区画溝は7世紀後半代の竪穴住居と重複しており、8世紀代の掘削と考えられている。

② 日影山遺跡⁽⁸⁾

武蔵国分僧寺と尼寺の間を北上する東山道は、国分僧寺北方の台地上の日影山遺跡で340mにわたって確認されている。道路跡は、4期にわたる変遷が確認されている。1期では幅70cmの側溝間の幅12mと確認され、2期は1期の側溝が埋没した後に側溝上を道路として利用した段階、3期は重複して幅54cmほどの側溝間の幅9mの道路として確認され、4期では側溝を伴わずに幅7.5mほどの道路跡として確認されている。

③ 武蔵国府から東の上遺跡に至る間の道路跡⁽⁹⁾

武蔵国府から東の上遺跡に至る間の道路跡については、平成10・11年度に6地点において発掘調査が行われ路線がほぼ確定されている。平成10年度に小平市上水本町、小平市原島農園の2ヶ所、平成11年度に小平市小川団地内、東村山市本町1丁目、東村山市本町2丁目土方邸、八国山緑園内で道路跡が確認されている。

このうち良好な状態で道路跡が確認された原島農園地点では、幅90～120cm、深さ50～60cmの側溝により区画された幅12mの道路跡が18mの範囲で確認されている。

土方邸地点では、幅60～90cm、深さ60～70cmの側溝により区画された幅11.4mの道路跡が21mの範囲で確認されている。

④ 吉見町・西吉見条里Ⅱ遺跡⁽¹⁰⁾

古代道路跡は、国指定史跡の吉見百穴横穴墓群の所在する吉見丘陵の南側、市野川に近い標高14～15mの沖積低地に確認された。道路跡は砂利を最大で40cm敷詰め、この上に若干の

土を被覆した構造であり、86mの範囲で確認されている。北端部で幅8m、南端部で幅11mを測る。

出土遺物には土師器・須恵器・鉄器・木器などがあり、これらの示す年代的特徴から7世紀末から9世紀後半代に至る約200年間の使用が想定されている。東山道武蔵路の一部と考えられるほか、郡衙を結ぶ伝路の可能性も考えられている。

⑤ 武蔵国府域における道路跡の調査⁽¹¹⁾

東京都府中市に位置する武蔵国府域における東山道武蔵路の調査は、12地点で行われており実態が明確になってきている。国府域は多摩川を臨む府中崖線沿いに東西2.5km、南北最大で1.8kmに展開しており、南北に走行する東山道武蔵路は国府域の西を限っている。

中心施設である国衙の北方は、東山道武蔵路と直交する道路により区画されている。

国府域における東山道武蔵路は、国府造営以前に開鑿され8世紀中頃には両側溝は埋没し、以後は幅12mを縮小して10世紀前半代まで維持されていたものと想定されている。

⑥ 東山道武蔵路における駅家の想定⁽¹²⁾

上野国邑楽郡より分岐する東山道武蔵路は、五ヶ駅を経て武蔵国府に至るものと想定されている。早く確認された所沢市・東の上遺跡では隣接する方形区画施設の存在などから駅家と想定されている。この他では、入間川に面した台地上の南東斜面に立地する、川越市の八幡前・若宮遺跡からは「驛長」の墨書土師器が出土しており、明確な施設は確認されていないものの武蔵国府から30kmの距離にあり、駅家の可能性が指摘されている。

東山道武蔵路の想定路線上の北武蔵地区の残る3駅は、東松山市・熊谷市・妻沼町付近に考えられているが明確とはなっていない。

【3・下野国】

下野国内における東山道は、西端の足利駅から東進して三鴨駅に至り、北西に進んで下野国府に近接する田部駅を経由して、さらに北西に進んで衣川・新田・磐上・黒川駅を経て陸奥国に続いている。

下野国内における東山道の調査は、最も多く実施されており、10ヶ所以上の遺跡で道路跡が確認されており、東山道の路線のかなりの部分が判明している⁽¹³⁾。

① 国府田遺跡⁽¹⁴⁾

渡良瀬川左岸の足利市街地に所在する国府田遺跡は昭和48年からの調査により、掘立柱建物跡7棟、基壇建物跡5棟などが確認されている。8世紀代後半から9世紀代にかけての足利郡家と考えられており、周辺に足利駅が想定される。

② 下野国府と田部駅間の確認された道路

下野市川中子に位置する北台遺跡からは、両側溝により区画された幅12.3mの道路跡が確認されている。また三ノ谷遺跡、諏訪山北遺跡でも道路跡が確認されており、それぞれ東山道と考えられている。

③ 上神主・茂原遺跡⁽¹⁵⁾

上神主・茂原遺跡は宇都宮市南端部に位置しており、この遺跡の南側に東山道路が走行している。田川に面する台地縁辺に立地する遺跡の南・西辺は幅2～3mの溝により区画されており、遺跡の規模は東西250m、南北は370m以上である。

遺跡北方には掘立柱建物跡と大形竪穴住居跡が展開しており、中央部には大形掘立柱建物跡が整然と配置されており、南部には37軒の総柱式掘立柱建物跡が整然と配置されている。これらは北部が雑舎域、中央部が正殿と脇殿からなる正庁域、南部が正倉域と想定されている。遺跡の継続時期は7世紀後半代から8世紀末に至る時期であり、8世紀代の河内郡衙として機能

した遺跡と想定されている。

古代道路は遺跡の南に隣接して位置する浅間神社古墳との間に確認され、遺跡の東側の崖を下っている。道路北端部で幅9mが確認されているが、南側では硬化した道路面が確認されたに留まる。

④ 長者ヶ平遺跡

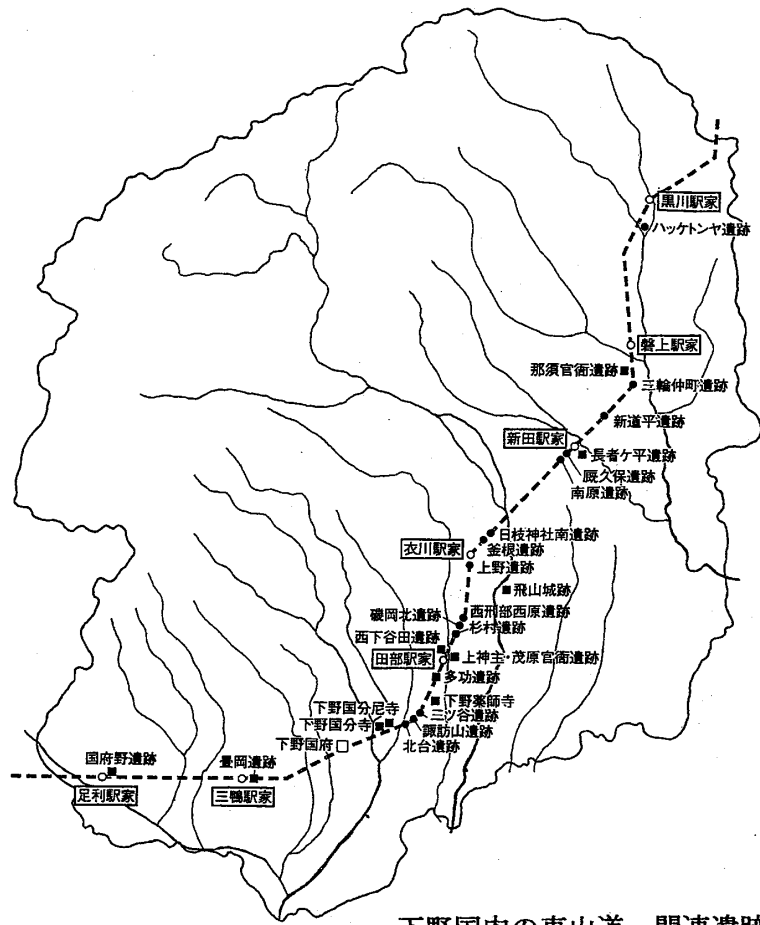
鬼怒川左岸の喜連川丘陵上の那須烏山市鴻野山に位置する長者ヶ平遺跡は、南北220m、東西350m以上の規模であり、4ブロックに分かれている。中央ブロックは八脚門を伴う正殿・脇殿が配置された中心区画であり、東・西ブロックは正倉院と考えられ、新田駅家の可能性も指摘されている。

⑤ 那須官衙遺跡⁽¹⁶⁾

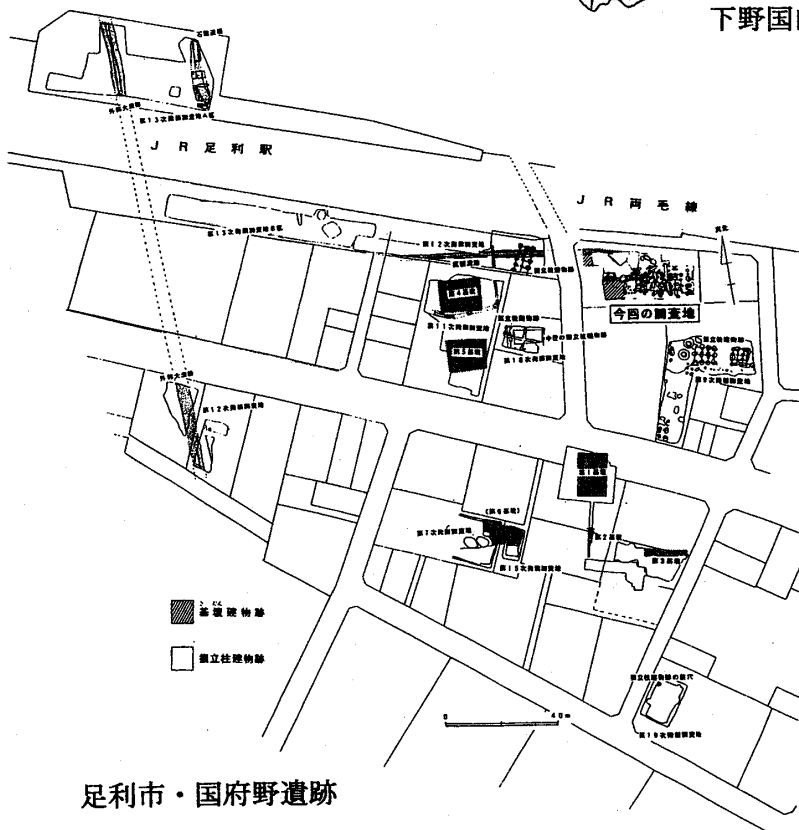
遺跡是那珂川右岸の段丘面上に立地しており、東西600m、南北200mにわたって展開している。溝により区画された西・中央・東・南東ブロックから構成されており、西ブロックは多数の総柱建物跡の確認により、8世紀前半に成立した正倉院と考えられている。

中央ブロックは不明ながら、東西100m、南北130m規模の東ブロックには大形の掘立柱建物が集中し、郡庁と考えられている。東西75m、南北110m以上の南東ブロックは、大形の掘立柱建物、井戸・大形竪穴住居跡などの存在から館の可能性が指摘されている。

西ブロックと東ブロックの中間の南側からは、道路跡が確認されている。傾斜地を掘り込んだ切り通し状の道路跡であり、古段階の幅は6.4m、新段階の幅は5.3mを測る。西・東ブロックの中間を北上する東山道と想定されており、官衙成立期の7世紀末～8世紀初頭に開鑿され、10世紀代に廃絶したものと考えられている。

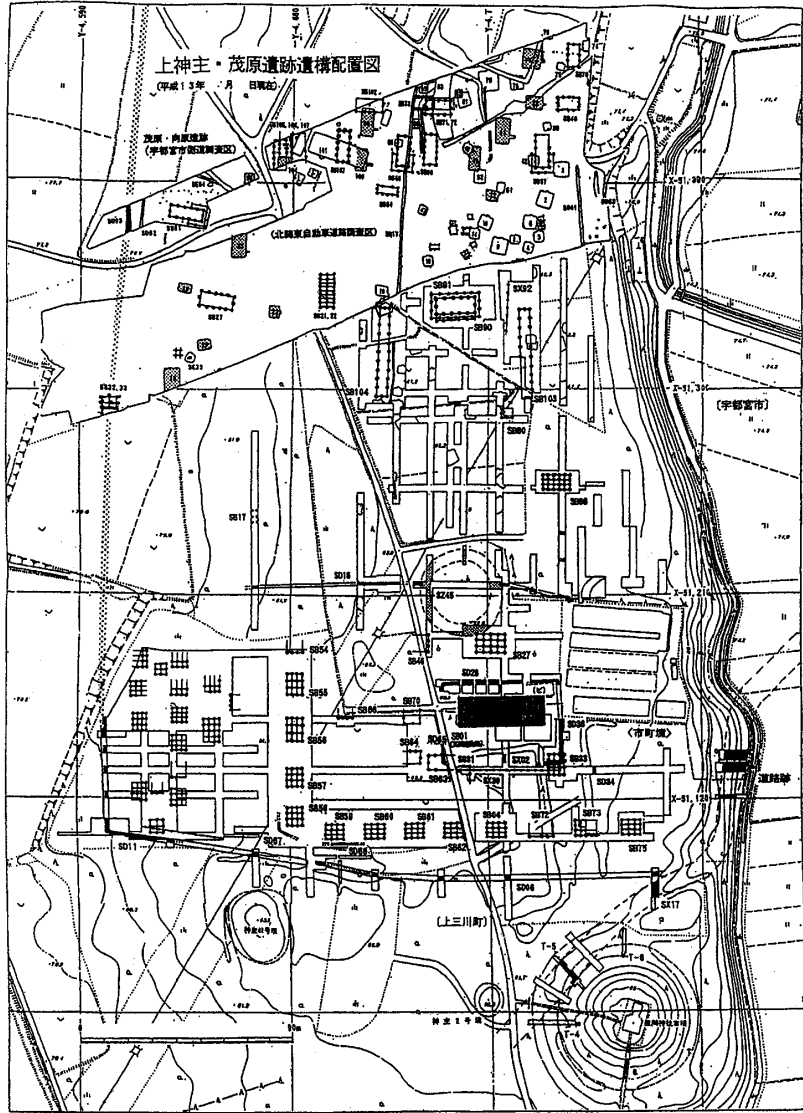


下野国内の東山道・関連遺跡

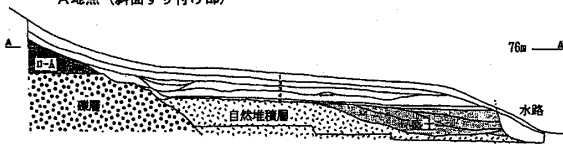


足利市・国府野遺跡

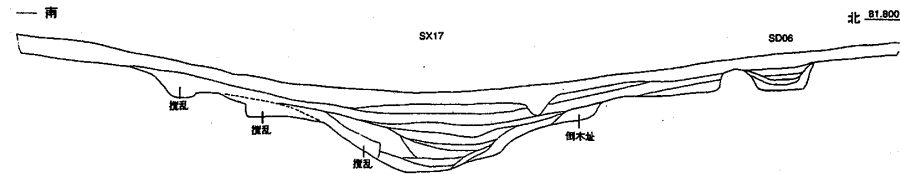
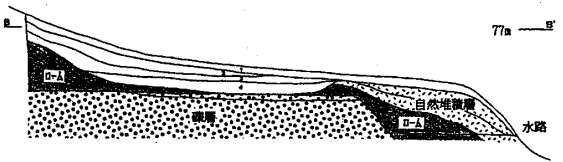
第12図 下野国東山道関連遺跡(1)



A地点 (斜面すり付け部)



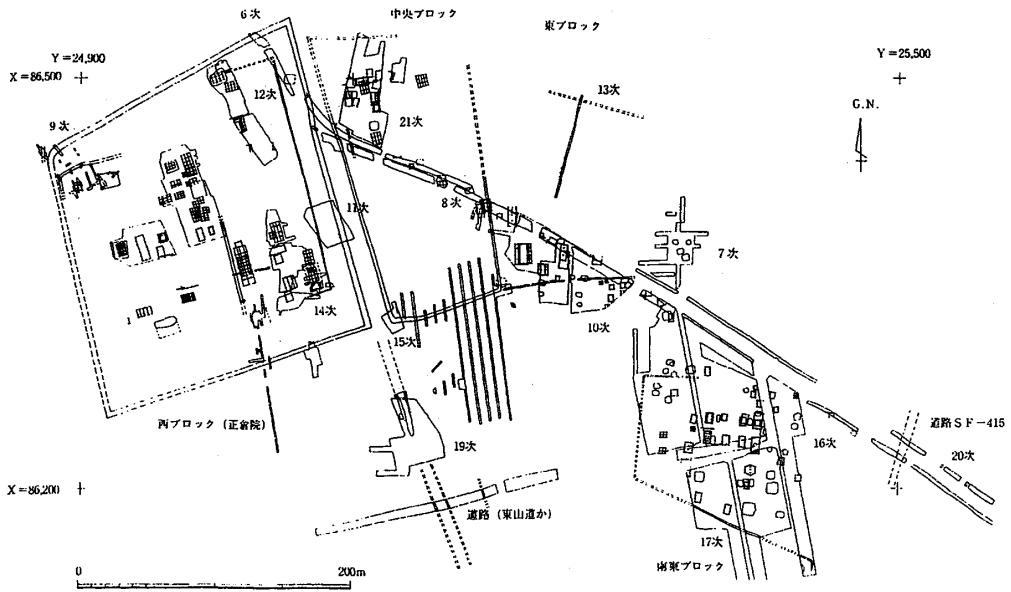
B地点 (切り通し部)



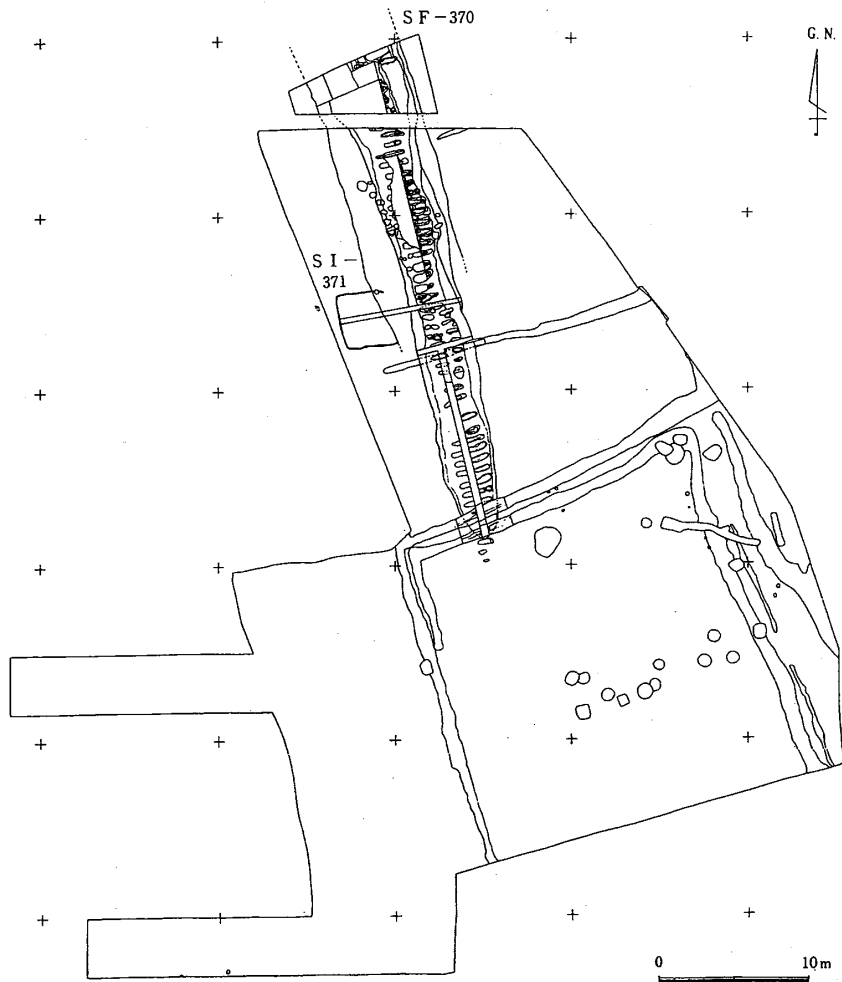
上神主・茂原遺跡



第13図 下野国東山道関連遺跡(2)



下野・那須官衙遺跡



道路遺構

第14図 下野国東山道関連遺跡(3)

以上東山道に属する諸国のうち、信濃国・上野国・武蔵国・下野国において発掘調査により明確になった道路跡および関連施設の概略について記してきた。各国の国府を結ぶ駅路である東山道の調査は、武蔵路を含めてかなりの部分が判明してきている現状が確認できた。しかしながら、道路を管理した駅家の遺構については未だ内容が明確になっているとは言い難い現状である。開発に対応する調査ではなく学術的調査の望まれるところである。

一方、駅路に先行して設置されたものとも考えられる、各国内の郡（評）家を結んだ伝路については、次第に明確となってきている郡（評）家遺跡から想定されてはいるものの、大半が不明な現状である。

北武蔵の岡部町・熊野遺跡は7世紀後半代の区画された施設と大規模な建物群が確認されており、遺跡を縦断する道路跡も確認されている。郡制施行以前の初期榛沢評家の可能性が指摘される遺跡であり、道路跡は郡衙を結ぶ伝路と想定されている⁽¹⁷⁾。

伝路の確認は、今後に望まれる重要な研究分野といえるところである。道路は資材・情報伝達の基礎であり、特に東山道は律令国家の重要課題であった北方の蝦夷対策とも関連して設置・管理が行われたものと考えられている。

- (1) 上郡町教育委員会『古代山陽道・野磨駅家跡』平成18年
- (2) 阿智村教育委員会『神坂峠』昭和44年
- (3) 軽井沢町教育委員会『入山峠』昭和58年
- (4) 倉澤正幸「信濃国」『日本古代道路事典』平成16年
- (5) 小宮俊久「上野国の古代交通網と官衙」『坂東の古代官衙と人々の交流』平成14年 埼玉考古学会
- (6) 高井佳弘「群馬県太田市大道西遺跡の推定東山路」『古代交通研究』第13号 平成16年
- (7) 根本 靖「東山道武蔵路と交通施設」『坂東の古代官衙と人々の交流』平成14年 埼玉考古学会
- (8) 西国分寺地区遺跡調査団『日影山遺跡 ～推定東山道武蔵路』平成8年
早川 泉「武蔵路の素顔」『多摩のあゆみ』第88号 平成9年
- (9) 古代学協会『東山道武蔵路の調査研究』古代学研究所研究報告 第6輯 平成18年
- (10) 弓 明義「吉見町西吉見条里Ⅱ遺跡の古代道路跡」『坂東の古代官衙と人々の交流』平成14年 埼玉考古学会
- (11) 江口 桂「武蔵国府の景観と人々の交流」『坂東の古代官衙と人々の交流』平成14年 埼玉考古学会
- (12) 木下 良「日本古代道のなかでの武蔵路」『多摩のあゆみ』第88号 平成9年
- (13) 栃木県立なす風土記の丘資料館『あずまのやまのみち』平成18年
- (14) 足利市教育委員会『平成9年度文化財保護年報』平成11年
- (15) 梁木誠・深谷昇「栃木県上神主・茂原遺跡の道路状遺構」『古代交通研究』第11号 平成14年
深谷 昇「下野国河内郡の官衙と交通」『坂東の古代官衙と人々の交流』平成14年 埼玉考古学会
- (16) 板橋正幸「下野国那須官衙発見の道路遺構」『古代交通研究』第8号 平成10年
- (17) 鳥羽政之・青木克尚「榛沢郡家と幡新羅郡家」『坂東の古代官衙と人々の交流』平成14年 埼玉考古学会